Stumento di Male

櫻木　夢羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｔｕｍｅｎｔｏ　ｄｉ　Ｍａｌｅ

【Ｎコード】
Ｎ８８８７Ｌ

【作者名】
櫻木　夢羽

【あらすじ】
ナーオス帝国第三皇女の華月は魔力がない。
双子の弟である第一皇子の優月は当代随一の魔力を持ち、才色兼備。
そんな弟に引け目を感じることもなく、気ままに生きてきた華月の日常は音をたてて崩れる。ある一通の手紙によって。
文章書くのが大嫌いな作者です。至らない上に駄文長文ですが、よろしくおねがいします。

始まりのその昔

人々は、恐れていた。
人だけでなく、全ての生き物が、魔王という存在を恐れていた。それは、本能的な恐怖であり、本能的な嫌悪。体を失いながらも、存在し続ける生命のないモノへの。
魔王は、強大な力で世界を支配した。多くの魔族を従え、気まぐれに人を殺した。無限とも思える程の魔力は神族を圧倒し、神にも引けをとらず、魔王は気ままに力を使い、世界の秩序を壊し続けた。

魔王は実体がないため〈器〉を媒体とし、世界を治めた。
ある時、魔王は〈器〉として一人の少女を選んだ。明るく、素直で、誰もが好きになれるような娘だった。婚約者がいて、幸せが約束されていた。彼女が選ばれた事を、多くの人が嘆いた。特に、婚約者が。
数年が経つと、魔王は少女の体に飽き、少女を壊した。その事を聞き、婚約者は怒り狂い、魔王を呪い、怨んだ。そして、その頃から〈器〉の資格のある者が殺され始めた。
婚約者は勇者（カヴァリエーレ）と呼ばれ、徐々に人々の支持を集めた。各地で魔族への抵抗が始まり、魔王は重臣を多く失くした。その間にも、〈器〉は殺され続け魔王は追い詰められた。
そして、勇者は全属性の天使、精霊の協力によって魔王の〈器〉を滅ぼす。

仮初の平和が訪れ、人々は一時の平穏を楽しんだ。新たな権力者が現れ、各地で戦争が始まる頃には勇者は姿を消していた。

不幸《しあわせ》の手紙

私は、城の奥で、ほとんど人と関わることもなく育った。勉強を教えてくれる学士と、身の回りの世話をしてくれる人が五人程。それと、義母さんと義兄の優月、私を認めてくれている僅かな義兄弟達。父とは長い間会ってない。

何故、父は会いに来ないのか。私という子が生まれてしまったことを反省してる？そんな筈はない。父には子供が履いて捨てる程いる。私もその一人だ。本当は、義母さんは私を怨むべきなんだ。なのに、義母さんは私を可愛がってくれた。悪いことをしたときには怒られたし、いい事をすれば褒めてくれたし、喜んでくれた。怒られて嬉しくはないけど、本気で怒っているのは愛しているからだ、と誰かが言っていた。

……嗚呼、そうだ。父が私に会いに来てくれないんは、私に魔力がないからだ。魔力があって当たり前のこの世界で、私は魔力を持たずして生まれてきた。私は、できそこないなんだ。

「華月様、聞いていますか？」

初老の、優しげな目に見つめられて現実に引き戻される。

「体調でもお悪いのですかな？」

嗚呼、私を心配してくれている。できそこないの私を。

「いいえ、ちょっとぼおっとしてただけです」

笑って首を振れば、納得したように頷いて講義を初めかやり直してくれる。不思議な満足感に満たされて写しかけのノートに目を落としたときに、控えめに扉が叩かれた。

「どうぞ」

学士が頷くのを確認してからそう言うと、入ってきたのは優月だった。

優月は私に微笑んでみせてから、学士に頭を下げた。
「邪魔してすいません。俺も一緒に受けて良いですか？」
「ふむ・・・・・・まぁ、よろしいでしょう」
もとから私だけでは大きな机だったから、一人増えても狭くない。
それが、いかに私が一人か思い知らされているように思えて少し嫌だ。
「華月と一緒に受けたくて無理言って来たんだ」
「・・・・・・ふーん」
優月は私が言うのもおかしいけど、シスコンだと思う。
　この前まで全寮制の学校に行っている間も手紙は毎日届いたし、帰ってきたら帰ってきで毎日部屋に来る。帰ってきた時はいきなり抱きしめられた。私が年頃の娘だというのも考えてほしい。
「それにしても、華月はすごいな。この講義って高等部の三年で習う内容だぞ」
「へー、そうなんだ」
聞き飽きてきた私を褒める台詞も、後一週間で聞けなくなるのか・・・・・・。
　一週間後には優月は学校に戻ってしまう。そうすれば、また夏休みまで退屈な日々が続くのだ。

『華月は、学校に行きたいと思わないの？』
「え？・・・・・・私は、魔力ないし」
風属性の精霊に聞かれ、首を振る。
　人と関わるのは、恐いし。ずっと城の中で育ってきて、友達もいないし。
『華月は、〈五感〉があるでしょ？魔力よりも凄いと思うけどな』
「よく分からないよ。城の外なんて見たことないもん」
知っている世界は、この部屋だけ。憧れる世界は何時も本の中で、人の話の中で。
　出たいと思ったことはある。だけど、何時(いつも)も見張られてたし、恐

いから行けなかった。
『華月って、弱虫だよね』
「自分でもそう思うよ」
『そんな華月に、もうすぐ幸せの手紙が来るよ』
「え？」
聞き返す間も与えずに、精霊は消えた。

翌日、私に一通の手紙が届いた。
優月の通っている菊王華学園からの特待生としての入学案内だった。
義母さんや、他の人の薦めもあり、私の入学が決まった。
心地よく私を守ってくれる、けれど息苦しい鳥篭から私は解放された。

不幸《しあわせ》の手紙（後書き）

男性声優さんたちの衝（笑）撃的なメドレーを聴きながら書きました
何回画面を拭いたことか・・・・・・↑w
子安さんのいよかんは最強だと思います、はい。

世界。

――帰りたい。

着いて早々にそう思う。

初等部からあるこの学園では殆どグループができている。途中入学の私の入る隙間なんてどこにも感じられない。

――優月の馬鹿。

生徒代表とやらで引きづられて行ってしまった兄。最悪。

「お、君が華月ちゃん？」

唐突に名前を呼ばれて、振り向く。そこには、美少女がいた。

燃えるように赤い髪と、対照的に静かなオレンジ色の虹彩（ヒトミ）の、どこか人間離れした子。綺麗ってのは、こういう人の為にあるんだなって思ってしまうほど。

――てか、背高いな。

「おーい、聞こえてる？」

「え、あ、はい」

顔を覗き込まれて、自分が見惚れてたことに気付く。

――あれ？

「華月ちゃんでいいんだよね？私はマリアローズ。同じ特待生だから、三年間よろしくね」

「よろしくおねがいします」

差し出された手を握り返した時に、感じた違和感。決して大きくないけど、確実なそれに、私の好奇心が首を持ち上げる。

「あー、敬語とか良いよ。同い年だしさ」

「え、同い年？」

――絶対上だと思ってた。

「うん、同じだよ。あ、そろそろ行かないと間に合わないから」

そう言って歩き出したマリアローズの後を追いかけながら、周りに気を配ってみると、誰もがマリアローズを気まずそうに見ている

ことに気付いた。後ろめたいことがあるような、怒ったような、怖いような、ぐちゃぐちゃの目でマリアローズを見ていた。
「あ、私の事はマリアとか、適当に呼んでね。華月って呼んでも良い？」
周りの視線に気付いてないのか、気にしてないのか、笑っているマリアローズ。
「うん。じゃ、マリアって呼ばしてもらうね」
それからは、他愛もない会話。学校の行事予定の話だとか、特待生の面々の話とか。
「マリアー、遅い。」
始業式の行われる講堂の入り口でこちらに向かって手を振る人影。
車椅子に座っているらしく、一回りほど小さい。
「あ、あれがユリス。同じ特待生だよ」
金髪に、夜空みたいな暗い藍色の虹彩（ヒトミ）のユリスが手を振りながら怒鳴る。
「早くしろって！のろま！ぐず！」
「はい、はい」
駄々っ子のように騒ぐユリスを宥めながら、講堂へと入っていく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8887l/

Stumento di Male

2010年10月13日21時27分発行